ユーゴスラヴィアの社会主義

―チトー大統領との会談をめぐりて―

嶋田啓一郎

一

第二十回党大会に対するソ連共産党中央委員会報告のなかで、第一書記エヌ・エス・フルシチョフは、「対外政策の分野で党が当面している任務はなにか」を論じ、特にチトー大統領の率いるユーゴスラヴィアについて、「兄弟であるユーゴスラヴィア連邦人民共和国の諸民族との友好と協力を、あらゆる方法でつよめること」〔註一〕を強調し、第一副首相アー・イ・ミコヤンもまたこの中央委員会報告に関する討論のなかで、「ユーゴスラヴィア革命の勝利は、成功のうちに社会主義を建設しつつあるユーゴスラヴィア共産党およびユーゴスラヴィア人民とわれわれとの、つよまつていく友好と兄弟のような同盟の源泉である。」と述べている。これが、今を去ること程遠からぬ一九四九年十一月のこと、コミンフォルムの決議『殺人者とスパイの権力下にあるユーゴスラヴィア共産党』において、ファシズムへの移行、国際帝国主義への脱落を糾弾せられ、「スパイ」の烙印を押されたユーゴスラヴィア社会主義に対する、ソ連の外交政策の新展開の方向なのである。

〔註一〕「ソ同盟共産党第二〇回大会」第一分冊、合同出版社版、五〇頁。
〔註二〕「ソ同盟共産党第二〇回大会」第二分冊、合同出版社版、二七頁。

ユーゴスラヴィア社会主義をめぐるこの激しい政治的変化に、われ等はいまさらのごとくに、歴史の有為転変のさだめ無さを痛感せしめられるのであるが、殊にスターリン主義との抗争に一國の運命を賭けたユーゴスラヴィア国民と、その指導者チトー大統領の感慨には、啻ならぬものがあるに違いない。

わが身をそれに賭けたれど
終りはわれに近からず
極みの姿を見さしめよ——
岩の高みに立つ人の
遠き眺めを見るがごと
ものの想いのいや涯に
国のさだめを知らんため。

ユーゴスラヴィアの詩人 stevan Raiçkovic は、疾風怒濤のなかに激しく動揺する祖国の運命を気遣つて、こう歌つている。[註一] 人口二億二千万の大国ソ連の強圧に抗しながら、人口僅かに千七百万のユーゴスラヴィアの民が、建国の辛苦を続けて行くのであつた。それはさだかに勝利の道であるのか。ソ連の圧迫が強烈であればあるほど、ユーゴスラヴィアの国民は、国のゆく手を見とおす広い展望の場所を求めずにはいられない。そこにチトー大統領が立つていた。今にして想えば、私がチトー大統領との会見の機会に恵まれた一九五三年の夏というのは、ユーゴスラヴィアの苦悩が未だ絶頂にある時期であつた。にもかかわらず、彼の確信と希望に満ちたまなざしは、嵐に抗する雄獅子のごとくに鋭い輝きをもつて、いばらの道を進むこの若い国の将来を見抜いていたように思われる。

【註一】 Stevan Raiçkovic; The End in not yet near, Yugoslavia, Life and Art, 1952, p. 104.

ユーゴスラヴィア社会主義——この国は共産主義国と呼ばれるけれども、現実に建設しつつあるのは、もちろん社会

主義の段階である――の歩み来つた途は、「チトー主義」の名のもとに、マルクス主義の歪曲化と反動化の典型として、世界のマルクス主義者たちから軽蔑と冷笑のまとにされてきたし、逆にまたいわゆる自由諸国からは、共産主義陣営に打ち込んだ「自由」のくさびであるかのような期待が寄せられてきた。新聞や書籍を通して学び得るユーゴスラヴィア社会主義の相貌は、いつも宣伝と攻撃のなかに泥まみれになつた陰欝なものであつたし、正直に言つて、チトー元帥に関して諸報道から与えられる印象には、軍人肌の「親分」がそれはそれなりにもつ低俗で陰険な策師肌の挙動を感じさせるものがあつた。これらの諸要素が重なり合つて、ユーゴスラヴィア社会主義についての私の理解は、ともすれば暗い先入観念に附き纏われ勝ちであつた。それにもかかわらず、ソ連をめぐる諸小国が瞬く間にソ連に対する「衛星国」の地位に置かれてゆく一般状勢のなかにあつて、ひとりこの小国のみが毅然として独自の存在領域を守り通す果敢な態度のなかには、単なる行きがかりや信念以上の打ち込んだものが感ぜられて、コミンフォルムの前掲の決議に言う「このスパイ一味は、ユーゴ人民の意志ではなく国際独占資本の意志を表現しており、従つてこの一味は、国の利益を裏切り、ユーゴの政治的独立と経済的自主性を失つた。」[註一] という審判には、なにか事実を歪曲するものが感じられもするのであつた。社会思想の研究に携わる者の一人として、ユーゴスラヴィア社会の現実と、それを動かしゆく指導者たちに直接触れることによつて、ユーゴスラヴィア社会主義の実相を把握することは、ソ連や米国の研究にも劣らず、深い関心を唆られることであつた。私が、欧洲旅行の旅すがら、米国の進歩的思想家 Sherwood Eddy 博士の主宰する調査団に参加して、ユーゴスラヴィアを訪問すべく決意をしたのは、社会思想の研究に当つて「事実」に即して本質を判断しようとする平素からの念願が、斯くして満されると考えたからであつた。

【註一】「前衛」第四六号、四四頁。

シャーウッド・エディ博士は、過去十五回にわたつてソ連に旅した珍らしい経験の持主であつて、「二つの世界」の対立を越えて、人類の生活水準と精神的自由との向上のために、謙虚に世界の現実に学ぼうとする良心的な基督教界の

指導者であり、博士の周囲に集る者は、同じ志を抱く真摯な学者、政治家、実業家たちであつた。調査団のプログラムは、アメリカ人独特の精力的な充実した日程をもつて満たされ、問題の核心に肉迫し得るために、多方面の解説的講座や、日毎の行事のあとの討論には、格別の心遣いが払われた。首都ベルグラードにおける政治・経済・宗教・文化各部門の指導者層との会談、ザグレブその他の諸地方における社会主義建設の実状視察——それは、私の従来のユーゴスラヴィア理解の誤謬を改めさせるのに与つて力があつたが、それにもましてわれ等の心をゆさぶつた印象的な事件は、やはりアドリア海の小島ブリオニにおけるチトー大統領との会見であつた。ユーゴ外務省は、特にこの会見におけるチトー大統領とわれ等の問答を印刷物に纒めて、参加者の手もとに送附してきたが、それはともすれば言き落しの多くなり勝ちなわれ等のメモを補うのに役立つた。その時のメモは、暫らく私の机のなかにあつて、陽の目を見ずにいたが、その後のソ連における新情勢の展開と、その結果として顕著にあらわれたユーゴスラヴィアとの関係の根本的修正は、われらとの会見におけるチトー大統領の発言の正当性を裏書きするかのごとくに感ぜられ、再びこのメモを取りだして、かの国の社会主義発展への関心を温ためるのであつた。

そこへユーゴスラヴィア外務省から、一九五五年度に再び行われたエデイ調査団の大統領会見に関する報告書を送附し来つたので、ソ連の情勢転換後における彼の発言を検討して、チトー大統領の堅持するユーゴスラヴィア社会主義の本質が、さらに明らかとなりゆく心地がするのであつた。ここには、チトーとの会見メモのなかの重要と思われる部分を中心に、一九五五年度会見報告書、またチトー問題に関する欧米の解説書や、私がかの国で蒐集した諸資料を読みあわせながら、ユーゴスラヴィア社会主義の真相を捉えてみたいとおもう。

二

海水浴場として欧洲にその名の聞えたオパティアを経て、チトー大統領の住むブリオニ島の対岸の小さな古都プーラ

に向かう数時間の自動車旅行は、欧洲の旅でももつとも美しい道程の一つに数えられている。七月の陽光は椰子樹の梢に明るく、とりわけ真蒼に澄みきつたアドリア海の水は、人魚を秘めているかのごとく、妖しくも心を魅するのであつた。

チトー大統領の乗用船「ズヴェズダ号」の横づけされたブリオニ島南岸の専用波止場には、「タイガー」という名のアルサス種の茶色の大統領愛犬が出迎えていた。ブリオニ島は、枝ぶりの良い松の並ぶ閑静で風流な眺望を誇つている。汀に沿う崖のうえに見える白色の簡素なコンクリート二階建が、われらの訪う大統領の夏の館である。赤いカンナの花の燃えるように咲きそろう庭を入つていくと、予期していた見張りの人影もなく、入口に自ら現れたのはチトーその人であつた。

それまで新聞で見慣れてきた軍服いかめしい風貌でもなく、またベルグラードのどの店先にも飾られている写真の・どちらかと言えば神経質で哲学青年の面持をもつた・華奢な容貌とも違つて、今うつつにわが前に立ち、にこやかに手を差し伸べるこの館のあるじは、思いのほかスマートで和かな好紳士である。六十一歳といえば、さすがに白髪のまじつた苦労人ではあるが、太く肉じまりのした赤ら顔の堂々たる体軀は、どう見ても五十歳の壮年としか見えない。クリーム色の背広に、薄青のシャツ、深藍のネクタイというスタイリスト振りに、金のシガレット・パイプと左手の金の大きな指環とが、予想した共産主義指導者の横顔には、いささか不均合に見えたのは、私の東洋流のひが目というべきものであろうか。

彼は己が部屋に、シェークスピア全集、トルストイ全集を飾り、わけてバルザックを愛読するという文化人である。私がここにチトーその人の印象を述べようとするのは、パルチザン戦の闘将チトーという職業的革命家の荒けずりの性格から、ユーゴスラヴィア社会主義の特質を軽率に割りだすことの誤りを指摘しておきたいからである。国防省のロンカレヴィチ将軍は、私のこの意見に答えて、「彼は常に文化の端麗を愛する。ユーゴスラヴィアには、『チトーのごと

くスマートに』という言葉があるくらいだ。」と微笑しながら、砲弾の飛びくるパルチザン戦のさなかで、髪をくしけずることをさえ忘れなかつたチトーの想い出を語つてくれたことがある。指導者のこうした素質は、ユーゴスラヴィアのごとく文化的発展の遅れた国における社会主義の進め方に、存外大きな影響を与える要素となることを、知つておかなければならぬ。コミンフォルムとの決定的な対立も、「ユーゴスラヴィアの文化を高めずして、何の革命」という建前から、国内文化水準の急進化を願うの一念をもつて、国内資源のソ連への大量持出しに抵抗せざるを得なかつたところに、直接の原因があつた。即ちいわゆる「チトーのナショナリズム」の根柢には、彼の文化主義的要求が秘められているというのが、われらの調査団の結論の一つであつた。

社会の進展に当つて、無数の偶然を超えて一つの社会的必然が自己を貫徹するという主張は、マルクス理論のかなめ石である。しかしスターリンやヒットラーの個人的特質が、世界歴史の進行を左右する重要な契機となつたように、少くともユーゴスラヴィア社会主義は、指導者チトーの個人的要因に支配されるところが極めて大きい。従つて、彼の過去の経歴と彼を中心とする新ユーゴ建設史を吟味することなしには、この国の社会主義の特色を語り得ないと言つても過言ではない。

彼の伝記としては、チトーの同意のもとに書かれた嘗つてのユーゴ政府情報部長 Vladimir Dedijer の **"Tito"**, Eng. tr. New York, 1953. という四四四頁の詳細な叙述を、最も信頼すべきものとして挙げ得るが、そのほか英国の新聞記者としてユーゴスラヴィアに駐在し、チトーとソ連政策との乖離をあまりに正確に指摘したために、時のユーゴ政府の対外的配慮から国外退去を命ぜられた Jan Yindrich の **"Tito versus Stalin,** London, 1950. のごときは、コミンフォルムと激突するチトーを客観的に叙述した書物として、われらの理解を助ける。米国ノース・カロライナ大学の R. H. Markham の **"Tito's Imperial Communism,** New York, 1947. は、時の漸く風雲を孕むチトーとソ連の関係を中心とした点で、また米国ハーバード大学の Adam B. Ulam の **"Titoism and the Cominform,** Cam-

bridge, 1952. は、ユーゴスラヴィアの複雑な民族関係のなかを巧みに統一に向うユーゴ共産党の特殊な地位を抉り出している点で、それぞれ興味深い示唆を与えるが、共産主義に関する米国人流の解釈が、雑音となつて、客観的把握を妨げている場合があるのは惜しいことである。東欧諸国の特殊情勢のなかで、ユーゴスラヴィア社会主義の占める独特の地位を知るためには、Hugh Seton-Watson; **The East European Revotution**, London, 1949. を繙かねばならない。

チトーの正しい名は Josip Broz ——しかし一九二〇年、ユーゴ政府が共産党禁示令を出した時、金属労働者組合を組織するために用いた "Tito" という変名が、愛称として用いられ、今では公式文書にも Josip Broz-Tito と自書している。一八九二年、クロアチアの Kumrrovac の小百姓の子として生まれ、錠前屋の仕事を始めたチトーは、第一次欧洲大戦の前線より脱走して、ロシアに辿りついた。戦争の無意義さにくらべて、革命運動には、民衆の行手にあかるさがあることを感じた。家を出て六年、ふたたび故国の土を踏んで、共産党に入党したのは、一九二〇年のことであつた。

一九三〇年逮捕せられて、「反逆罪」に問われ、四年の獄窓生活を送つた彼は、出獄するとヴィエンナを経てモスコーに走り、一九三六年のスペイン内乱勃発とともに、ユーゴ義勇兵を組織するため巴里に赴いた。〔註一〕一九四一年三月、ユーゴ王室政府は独逸・伊太利・日本三国枢軸同盟に調印・加盟した。ナチスへの反感を抱く民衆は、「奴隷たらんよりは死を！」を合言葉として、ベルグラードに蜂起し、王室は失脚して、同盟は破棄せられた。ローズベルト米大統領はこの三月二十七日を呼んで、「ヒットラーの運命の転回点」と言つたが、それは、ナチス軍隊がユーゴスラヴィアに鋒先を転じ、ために五月十五日から六月二十二日までロシア攻撃を延期せざるを得ぬ事情におき、冬将軍の迫る以前にモスコーに進出することを阻まれたからである。〔註二〕ひとり独逸軍のみならず、伊太利、ハンガリー、ブルガリア等の枢軸国からの攻撃に抵抗しながら、宣告布告なき戦争が、国内全土に展開された。このゲリラ戦の先頭に立つたのがチトーの

率いる共産党であつた。一九四一年には僅かに四万一千を数うるに過ぎなかつたこれらのパルチザンは、一九四四年には八十万に達した。

【註一】 Jan Yindrich; Tito v. Stalin, p. 193.

【註二】 Yugoslavia; New Land in the Making, p. 19.

独逸軍に対する抵抗戦の先鞭をつけたのは、実はチトーではなく、王政復古を目ざす Draza Mihailovic 大佐であつた。彼を中心とする Chetnik 運動が、王政復古の名分をもつては大衆を動員し得ぬことが次第に明らかとなると、単にファシスト打破のためのみならず、新社会の建設を目標とする強敵、チトーのパルチザンと戦うためには、ミハイロヴィチは共通の利害から、戦半ばにして独逸軍と密約して、チトーに挑戦する態度にでた。連合軍はチトーに味方して、ミハイロヴィチ支持を取消し、ミハイロヴィチはボスニアにて捕えられ、処刑せられた。[註一] かくして今や抵抗戦の指導者として、チトーの地位は確立した。独・伊両国はユーゴスラヴィアの全土に協力者を求めたが、国内ファシスト運動としての "Ustashi" を率いて、ヒットラーの援助のもとに、新「クロアチア共和国」の独裁者として登場した Ante Pavelic のごとき、油断のならぬ対立者があつた。カトリック教会の大司教 Stepinac が、このウスターシ運動の支持者であつたことは、その後のチトーと教会との関係に不幸な摩擦の原因ともなつた。[註二] 「今われらにとつても最も危険なことは、途中で立ち停まることである。われらが戦争のなかで達成したものは、未だ手始めに過ぎない。今やわれらは殆んど想像もできぬような任務、圧倒的な困難に当面しているが、それと戦うのに如何なる手段をもつているというのであろうか。われらは強固な意志、高邁な士気、そしてわれらの体力以外の何ものをも持たないのだ。[註三]」 というチトーの言葉は、彼の置かれている立場をいかにもよく物語つている。もし彼がこの「強固な意志、高邁な士気」の人物でないとすれば、このあとに起つたソ連との抗争は、到底有り得べからざることであつたと言わなければならない。

【註一】 Vladmir Dedizer, Tito, p. 244—248.

【註二】 Yugoslavia; New Land in the Making, p. 21.
【註三】 Vladimir Dedijer; Op. cit., p. 242.

三

一九四三年、チトーは国民解放委員会総裁の地位に即き、元帥に任ぜられた。ユーゴ連邦人民共和国が成立したのは一九四五年十一月のことであつた。解放戦が終ると、彼は戦争に荒廃したユーゴの再建の大業のなかで、国内に未だ残る反対者との対立を克服しなければならなかつた。戦争によつて国民のなかの九人に一人、即ち百七十万人は殺害され、ほぼ同数が負傷し、つまり全人口の約四分の一が失われ或いは傷いたのである。三百五十万人は家を失い、二十八万九千の農場は焼かれ、鉄道の五〇%、鉱山・工場・発電所の多くは破壊され、馬の六七%、牛の五五%、羊の六三%、豚の五八%は失われた。その荒廃のなかで、近代国家を建設する五ケ年計画（一九四七―一九五一年）が開始せられ、工業化と電化の二大目的に向つての進軍が始つた。そのときユーゴスラヴィアの前途に立ちはだかる重大な障害となつたのが、ソ連の対ユ政策であつた。

【註一】 Yugoslavia; New Land in the Making, p. 29―30.

スターリンの国際共産党に対する要求は、簡明直截に次の言葉に要約される。「注文をつけずに、ためらうことなく、無条件にソ連を守ろうとする者のみが国際主義者である。なぜならば、ソ連は世界革命運動の基礎であり、ソ連を守らずして、この革命運動を前進させ、守ることは不可能である。」[註一] その実際的結果は、ユーゴスラヴィアに対する経済的重圧という形をとつた。デディエは書いている――「一九四六年の春のこと、チトーのモスコー訪問に際して、ソヴェト・ユーゴ合弁諸会社の設立を含む経済事項に関して、スターリン及びモロトフとの詳細な討議が行われた。ユーゴ側は、ユーゴ労働者階級の剰余労働価値の一部分がソ連に取られてゆく事実あるにもかかわらず、これらの会社がユ

ーゴ工業化に貢献すると考えられたので、合弁会社創立に原則的に同意した。[註二]」

【註一】 スターリン全集、第十巻、五一頁。

【註二】 Vladimir Dedijer; Tito, p. 270.

しかし現実の契約に示されたソ連の態度には、ユーゴの忍び難いものがあつた。一例を挙げると、石油において、石油坑の現物出資に対して、ペルシアには合併会社出資額の五〇%、ハンガリーには一五%と評価したのに、「ソヴェト計画案によれば、ユーゴスラヴィア石油田の価値は、該企業のユーゴ出資として認められないことになつた。それには、油田は何等の社会的価値をもたぬ自然的富であるというマルクスの言葉が引用された。[註一]」協約第八条は明らかに生産におけるロシアの独占権の確立を求めている。しかもユーゴは五ケ年計画のために税金と物資とを最も必要とする時期に、ほとんど凡ての石油を無税でソ連に輸出しなければならない。[註二] 合弁銀行や"Justa"航空運輸会社の提案のごときも、要するにユーゴ主権の抹殺を試みるものに他ならぬと考えられた。ユーゴスラヴィアは、必ずしも国土が貧しいというのではない。現代工業に重要な二十六種類の鉱石のうち、二十三種は国内から生産され、殊にボーキサイト、鉛、アンチモニーは欧洲第一位、水銀、亜鉛は欧洲第二位を占めている。戦前の王政は、不幸にも、たとえばボール銅山をフランス人に、トレプカの鉛をイギリス人にというように、これらの資源を殆んど外国資本の手にゆだね、国内産業の開発のため用いる機会を失わせてきたが、[註三] いま漸く社会主義建設のために活用しようとすると、ソ連はそれを阻もうとしている。一九四八年十二月二十七日のチトーの連邦議会演説によれば、それに先立つ十ケ月間に銅の七二%、水銀の七二%、鉄鉱石の一〇〇%、黄鉄鉱石の九六・一%、鉛五九・五%、亜鉛九七・三%、六麻九三・九%というように、ソ連への物資の大量持出しが行われている。[註四]

【註一】 Uradimir Dedijer; Op. cit., p. 278.

【註二】 Uradimir Dedijer; Op. cit., p. 279.

【註三】 Yugoslavia; New Land in the Making, p. 5.
【註四】 Jan Yindrich; Op. cit., p. 127.

右のチトー演説に曰く、「われらは、能うかぎり早く社会主義を建設しようとしているのである。われらは国を工業化し、電気を供給しつつある。他国に原料を供給し、完成品を輸入するに過ぎぬ後進的農業国にとどまるわけにはゆかぬ。既に進歩した工業をもつ国々への原料供給源たるに甘んじてはならぬ。過去及び現在に行われているように、かれ等から高価な工業製品を買い入れながら、一方ではわれらの民が、低い文化・生活水準をもつ貧しい後進的状態を続け困難と悲惨に附きまとわれて、未開発の非文明的バルカンと呼ばれるようなことを続けてはならない。」〔註一〕 これを実現しようとすれば、世界革命の成功は「まずソ連の充実から！」というソ連中心主義的スターリン原則に対する原理的対抗は、不可避のこととなる。発展段階を異にする個々の国々が、各々の事情に即応して、直ちに社会主義建設を開始し得るという「共産主義の発展不均等」原則の主張が、即ちそれである。チェッコスロヴァキア、ルーマニア、ブルガリア、ポーランド、ハンガリー等の東欧諸国は、みなソ連軍隊の力によつて解放された国であるが、独りユーゴスラヴィアのみは、戦時中に自己の力をもつて、激しい苦闘と犠牲のあと、解放を為しとげたのである。チトーは、革命と建設における自国の主体性を主張し得る歴史的裏附けを自信していた。〔註二〕

【註一】 Jan Yindrich; Op. cit., p. 124.
【註二】 Vladimir Dedijer; Op. cit., p. 339.

一九四八年六月ソ連のジダーノフ、マレンコフ、伊太利のトリアッチなどの出席するブカレストのコミンフォルム会議は、チトーを「帝国主義的スパイ」と断定し、ユーゴ共産党の追放を決議した。

ベルグラト市民は、六月三十日朝のユーゴ共産党機関紙 "Borba" を争つて購入し、コミンフォルム決議を貪り読んだが、民衆はスターリンの期待したように蜂起して、チトー政権の顚覆を計かるどころか、却つてこの日、枢軸に対

抗してヒットラーに挑戦したあの三月二十七日と同じ印象を抱いたという。[註一] スターリン主義のもとでは、自分自身で考える権利が意味をもつというよりは、自分の考えは自分のため共産党が考えてくれる。自分はひたすら服従するのみである。チトーは自らのため、またユーゴスラヴィアのために思索する権利を取り戻したのである。彼の示したのは、愛国心に位置を与える新型の共産主義であつた。[註二]

【註一】 Vladimir Dedijer; Op. cit., p. 363.

【註二】 Jan Yindrich; Op. cit., p. 199.

デディエの言葉をもつてすれば、「この時期のユーゴスラヴィアは、極度に困難であつた。ユーゴスラヴィアは、世界にただ独り立つていた。」[註一] かかる事態のなかで開催された第五回ユーゴ共産党大会において、チトーの歴史的な演説は、次のごとき言葉をもつて結ばれている。「同志諸君、私はわれらが困難な局面、試錬の時期にあることを警告する。党は困難な試錬に直面しているが、もしわれらが党内に強い勇気と統一と決意とを保持しさえすれば、もしわれらが神経を失うことさえなければ、われらの勝利は確実であろう。」[註二] それは、ゴリアテの前に進み出た若きダビデよりも、さらに冒険、さらに苦闘に満ちた悲壮な対決であつた。

【註一】 Vladimir Dedijer; Op. cit., p. 365.

【註二】 Vladimir Dedijer; Op. cit., p. 371.

もし確信に満ちたチトーが存在しなかつたならば、ユーゴスラヴィアはソ連の衛星国たるの運命を辿つたことであろう。社会主義建設の希望は民を励まし、その実践は戦後の社会を虚無と頽廃から救つた。五ヶ年計画は、電力を三倍に、石炭を二倍に、石油を三十倍に、金属工業を八倍に、化学工業を五倍にというように、全体を平均して四倍の増産を実現した。しかし今われらの会見するチトー大統領は、その対立者スターリンの急逝後日なお浅く、未だソ連の「雪解け」は起らず、ソ連とその衛星国との包囲鉄環のなかを前進する苦難の政治家であつた。

四

「ミスター・プレジデント」――われらは大統領に話しかけるとき、このような呼び方をした。問い始めたのはニュー・ジャージー洲議会議長のベーツ博士。

「ユーゴ共産主義とソ連共産主義との主たる相違性如何。」

答、「それは理論と実践との両側面から言うことができる。」チトーの答えの要点は、こうである――自分たちの歩む道はマルクス主義のオーソドックスである。マルクス、従つてわれらにとつては人間、それも自由の人間こそ一切の目標である。もつとも早く、しかし能うかぎり自由でデモクラティクな方法で、個人と社会のためのより良き生活を創造することが、ユーゴスラヴィアの願望である。マルクスは共産社会を「自由人の結合」と規定したのではなかつたか。しかるにスターリンのもとでは、人間は数量であり、人民は指導者層の全命令にひたすら服従すべき、色彩なき大衆として取扱われている。ユーゴスラヴィアでは、経済・文化の全分野における権力の分散化と非官僚主義化とによつて、『国家』は衰退の方向をとり、Socialist Democracy が成長しつつあるのに、スターリン民主主義は国民の自由を尊重する方向をとらず、官僚主義的専制主義の線をたどつて、帝国主義的な国家的資本主義のすがたをとるに至つたと。

チトーとソ連との対立は、前述のごとくユーゴ資源の搾取に対する反抗を契機としたものであつたが、対抗の進むにつれて、共産主義実現過程における最大限の自由という考え方は、次第に強められた。一九五二年の第六回共産党大会におけるチトー演説「ユーゴ共産主義者の Socialist Democracy への苦闘」は、特にその第二部を「経済及び人民統治機関における管理の Decentralization and democratization の諸問題」に当て、ソ連と比較して、「われらの発展、われらの社会生活の民主化、即ち socialist democracy の十分な達成は、一面には社会主義的特質を喪失して、世界

の一層の革命的・社会主義的発展にとつて重大な脅威となりつつあるソ連的方法、ソ連的実践、ソ連的現実に対抗する絶えざる努力として、他面には社会主義にとつては異質的な、西欧から来た諸概念と対立するものとして、展開されてきた。[註1]」と述べている。「スターリンにおける権力の集中化に対するユーゴの権力分散化」という言葉は、国内各所の訪問中に屢々聞かされるかれらの一つの誇りであり、たとえばベルグラート郊外の大鉄工場"Zeleznik"を見学した折も、ヤンコヴィチ支配人は、上からの干渉ではなく、労働組合における自主的活動が、いかに生産性を高めたかを語りきかせるのであつた。ユーゴでは商工業は凡て労働組合による集団経営をもつて運営されている。一九五〇年、ユーゴ政府は、ソ連方式の工場経営に対する国家支配人制度を廃止し、官僚主義的中央集権主義の危険を排除した。

【註1】Sixth Congress of the Communist Party of Yugoslavia, 1952, p. 26.

ここで大統領は、実践問題の相違に論点を向けて、ソ連との阻隔の真因を説明しようとする。「基本的相違点は、国家のあいだ、ことに大国と小国との関係に対する態度と世界の将来の発展についての見解にある。われらは凡ての国の平等、また各国の自由な発展の権利を認め、従つていかなる国も他国に干渉する権利をもたぬと信ずる。しかるにソ連は、大国として、外国の内政問題に干渉する権利をもつているという考えを捨てない。」

大統領はユーゴスラヴィアの外交政策は、国際連合の根本精神に沿うこと以外にないという。小国が独立を維持するためには、国連の意義は重要である。しかし国連がその課題を果し得るためには、大国が小国を尊重し、帝国主義的態度は禁ぜられなければならぬ、と。

エブレット・パルマー氏の質問、「貴方は米国の建設者ジョージ・ワシントンと同じ役割を果されつつあると思うが、貴方は彼と同じような政治的自由を国民に保障なさるであろうか。」

答、「われわれは、政治的自由をもつていると想う。国内を歩いて、農夫、市民、また種々の反動的残存者と語つてみられるならば、国民は自由に語り、ある者がわれわれを悪しざまに言つても、投獄されることはないことが、おわか

りになろう。

しかし多数政党結成の問題については、特に説明を要しよう。われらはソ連とその衛星国に包囲されながら、新社会建設、工業化のために努力しなければならない国である。そのうえに、第一次大戦後のベルサイニ条約の落し子として、多数民族よりなるバルカン半島の後進国である。このような国で多数政党を許すとすれば、何をも達成し得ぬことになつて了うであろう。クロアチア、セルビア、マセドニア、スロヴェニア、ボスニア、ヘルツェゴヴィナ、モンテネグロの各民族地域に異る政党が生まれ、互いに民族問題で争い、国の存立を危くするであろう。われらは国民的統一の道を選ばなければならない。そのためには、われらは一つの計画、一つの思想、一つの政党をもたなければならない。国民の一層幸福な将来を築くために最大の努力を払いつつある時に、民族間の不和に起因する政党的争いを許すことはできない。諸政党結成を許すことは、発展という車の下に石を投げるものとなるであろう。一国の発展が無政府の道を辿るならば、その国は滅びなければならない。『諸君は多数政党をつくる権利をもつていないが、SSRNJ（労働者ユーゴ社会主義連合）に行けば、そこにはプログラムが用意されている、其処で討論して、多数者が定まれば、諸君はこれに従わねばならぬが、多数者が諸君に味方するならば、諸君の意見は普及するであろう。』と言つた方が、一層すぐれているのである。

それに加えて、われらは先進及び未開発の諸共和国をもつている。スロヴェニアは高度に発達し、クロアチアはやや遅れ、セルビアは一層おくれているが、ボスニア、ヘルツェゴヴィナ、マケドニア及びモンテネグロよりは発達している。われらは民族＝政党を許していないから、発達した共和国には『諸君はモンテネグロやマケドニアに、その水準の引上げを助けるために協力せねばならぬ』と言うことができるのであるが、もし諸政党を認めているとすれば、それは困難となり、モンテネグロ、マケドニア、ボスニアは援助を受け得なくなるのである。外国からの訪問者には、われらの選んだ道の長所を知つて貰うために、われらの発展の真相を研究して頂きたいものである。」

これでは、やはり共産党独裁である。ユーゴ政治組織の最も重要な因子は、労働組合、青年婦人組織及び幾百万よりなる個人が結成する「人民戦線」である。彼等は全国的な文盲解消運動、任意労働奉仕計画などに参加し、あらゆる背景を超えて、社会主義建設に協力するわけである。「人民戦線」は、投票者に候補名簿を示すけれども、候補者は必ずしも「人民戦線」のメンバーでなくてもよい。選挙法では、候補者は百名からの指名を受ければよいことになっている。投票者が政府の政策に反対を表明したければ、自己の投票を「白紙投票箱」に投ずればよい。一九四五年の「人民戦線」の票数獲得率は九〇・四八%であつたが、一九五〇年選挙では九三・四二%に向上した。反対投票は六・五%であつたが、クロアチア地域だけをとれば一五%を示した。[註一]

【註一】 Yugoslavia, New Land in the Making, p. 26.

人々の態度は、案外に陽気であつたが、共産党員以外の知識人と語り合うと、われらの問に対して政治批評の或る一線までゆくと、表情を暗くして打ちもだすのであつた。しかし国民は、対ソ関係という共通の艱難のためにチトー支持に団結し、その協力的態度がこの国の最大の弱点たる民族対立の危機を緩和しているように思われた。

「ユーゴ」とはスラヴ語の「南」を意味し、ユーゴスラヴィアとは即ち、南方スラヴ民族の国を意味する。同じ南スラヴ民族群に属しながら、スロヴェニア人とクロアチア人とは西欧文化の影響のもとに生活水準を高め、クロアチア人はローマ旧教に帰依して、共産主義への強固な反対分子となつているのに対して、セルビア、マケドニア、モンテネグロ人はギリシア正教を奉じ、特にセルビア人は、ビザンチン文化への歴史的接触を媒介として、伝統的にロシアに対する友好心を培つている。この民族的感情の相違が、ソ連との利害的対立における共通の立場に隠蔽されているあいだ、チトーの国内統一は比較的容易であつたが、ブルガーニン、フルシチョフの訪問を起点とするソ連との和解は、今後ふたたびユーゴ国内の民族対立を激化し、チトーの独裁的統一の必要を却つて強化せしめることとなるかも知れない。チトーの大きな人格的迫力は、民族対立の危機に打勝つであろう。しかしもしチトーの逝去というような不測の事故が突発

するとなると、統一を失つた民族問題は、ユーゴスラヴィア社会主義にとつて躓きの石とならぬとは云えない。

五

調査団のマネヂャーをつとめるワルトマン氏は、政治学の研究者である。その問いに曰く、「もし私のマルクス理解が正しいとすれば、マルクスは、階級なき社会は資本主義が十分にその任務を果し終えた時でなければ、実現しないと言つている。ユーゴスラヴィアの実践を通して、大統領はこれを如何にお考えになるだろうか。」

答、「なによりも先ず、このマルクスの命題は、資本主義社会のみに関するものではなく、過去の社会の全体的発展に関するものである。社会及び自然を、われらは弁証法的に観る。一貫して、新しきものは古きものから生れる。宛かも資本主義が封建社会から生れたように、資本主義からより高度の社会が生じ来たるであろう。社会の技術的その他の発展は、より完全な体制の到来の必要を含んでいる。ユーゴスラヴィアでは、われらは資本主義社会を去つて、技術的産業的後進性、古い遅れた概念など、わが国の重荷となつている凡ての要素を考慮に入れながら、特殊なユーゴ的な遣り方で、社会主義を建設しつつある。マルクス理論は、一般的方向を選ぶための軸としてのみ役立つが、われらは常に苦痛の最も少い道を求めようとする。革命とは、産婆のごときものとマルクスは言つたことがある。即ち産婆が達人であれば、母親の生みの苦しみを免れさせることができるが、そうでない場合には、母も子も死ぬことがある。新制度への新しい道を求めるに当つて、われらはソ連的見解と抗争することとなつたのである。それに従えばわれらはソ連的な遣り方——多くの人民を死に追い遣るバリケードの道、軍隊と秘密警察の道を見倣わなければならない。そのような道を歩むことを欲しないわれらは、自己独特の進み方を選んだのである。西欧諸国はそれぞれ独特の進路をもち、今日既に新しい社会組織に向いつつある。もとよりこのことが未だ明確に自覚されているわけではないが、各国はみなその目標へと動かされているのである。生産手段がかくも高い水準に達したからには、もはやそれが私的個人によつて支配さ

れることは不可能であり、社会がこれを掌握しなければならないのである。」

この調査団の一九五五年訪問における同じワルトマン氏の質問に対する答えは、ユーゴ社会主義の性格を知るために有意義である。

質問、「レーニンの『国家と革命』のごとき共産主義の古典的著作によれば、国家は衰滅するというが、この共産主義の見透しは、貴方の権力分散化の努力を理論的に支えるものとお考えになるのか。」

答、「権力分散化は、最も広汎な階層をして支配の地位に立たしめることを意味する。かれ等の凡てが同時に支配者の地位に立つという意味ではないが、かれ等の声が聞き届けられ、自由にかれ等の機関を選任し、かれらの進路を決定するのである。当然、これは無政府主義的に行われるのではなく、組織的方法による。中央集権されなければならぬ唯一つのものは、人民がコンミュニティの存在を不可欠のものと考え、無政府主義者とならないための人民の意識である。

それ故、私がこの国の権力分散化について語る場合にも、この点で、只に国家権力の分散化によつてのみならず、凡ての者の最も民主的行動の一つ、つまり自己管理の形での労働者の経済参加によつて、大幅の前進を遂げてきたと言うことができる。かくしてわれらは労働者自身のイニシアチヴに自由な発揮の道を与え、かれ等をして単なる対象ではなく、自己の事業を十分に方向づけ管理することのできる主体たらしめてきたのである。勿論、かれ等は社会に対する自己の義務を有し、これを心に銘記しておかなければならぬが、かれ等は十分これを自覚しているのである。このことは、われらの今後の発展に有意義な主要な業績である。管理という点からも、また下級機関へと移管された政治的・経済的その他の機能に関しても、国家の衰退ということが起りつつある。とは言え統一計画化、統制、軍隊、外交など権力分散化し得ないものもある。従つて未だ分散化され得ない或る種の機能が残されているわけである。[註1]」

【註1】President Tito's Interview with the Members of the Sherwood Eddy Seminar, 1955, p. 11—13.

教員組合のプフルーガー氏の質問、「一九四八年の分裂当時、ソ連は優勢で、西の側は足並が揃っていなかったのにどうしてソ連はユーゴスラヴィアに進撃しなかったのか。」

確信に満ちた首の振りようで、大統領は余裕ある口調をもつて答える。「それにお答えすることは困難ではない。第一に、当時いかなる新しい紛争も、かれらの恐れる第三次世界大戦に導く危険あることを感じたのである。第二にかれらはユーゴスラヴィアの当時の強固な軍隊と国民の団結とを知つていた。フィンランドとの戦にさえ手を焼いたかれらは、第二次大戦のとき、六箇国の占領軍と独力戦つた歴史をもつユーゴ大衆に対しては、いわゆる冷たい戦争で勝つほうが賢明だと考えたのである。しかしわれらの五ケ年計画はそれを突き破つた。」

国内の各所に数多く目につくユーゴ軍隊の装備は、素人眼にも貧相に見え、近代科学戦よりも独特のパルチザン戦の勇者として、芯の強さを誇る若者たちと見受けられた。ソ連との和解によつて、今後大幅の軍縮が可能となれば、これらの若者たちと、国としては不相応に大きい軍事費とが、産業建設に振り向けられ、生活水準の向上運動を通して、ユーゴ共産党は国民の信望を繋ぎとめ得るであろう。国内諸民族対立が一大弱点でありながら、チトー政権の危機にまで発展しないと予測されるのは、統一的な社会主義建設の魅力の方が、遙かに重要な役割を演ずると考えられるからである。

ソ連の変貌は、チトーのまなこに如何に映じたか。一九五五年調査団記録書には、次のような興味ある質問が行われている。シャロット・ライオンズ夫人の間、「最近のフルシチョフ、ブルガーニンのユーゴ訪問の主な収穫は何であつたか。嘗つての不和の根本的理由は取除かれたであろうか。」

答、「ソ連指導者たちはその会談のなかで、ユーゴスラヴィアに対して大きな不正を働いた人々のあつたことを認めているから、私はこの訪問には積極的収穫があつたと想う。かれ等はその首謀者はベリアであると言つたし、私もまたベリアにも責任があると考えるけれども、最も重要なのはスターリンであると言わねばならない。

勿論、その結果としてこの会談で、ユーゴスラヴィアの一九四八年の位置への復帰が協定されたわけではない。われらは自己の道を歩んで国内生活の建設を行いつつあるし、ソ連はソ連の道を歩んで国内生活を建設している。かれ等はこのことに何等反対していない。さらにこの点に関し、頗る重要な諒解に達した。即ちユーゴスラヴィアは平和的外交政策を進め、ソ連はかかる平和的外交政策を絶対に受けいれるという声明が行われた。

スターリン亡き後のソ連新指導者たちは、それがいかなるものであれ、社会体制の唯一つの類型をもつて世界を支配することはできないということ、即ち世界には異る歴史的発展を背景とする多くの民衆があり、各々自己のコースを決定する必要があり、かれ等を何等か唯一つの鋳型に従わせようとすることはできないという結論に達したのである。

ソ連指導者たちのこうした態度から考えて、ソ連の現在の指導者たちは戦争を欲してをらず、平和的手段によつて紛争問題を解決する行き方を真実に求めているように想われる。〔註一〕」

【註一】President Tito's Interview with the Members of the Sherwood Eddy Seminar, 1955.

六

チトー大統領の要求して止まぬものは、社会主義発展における不均等発展原則の承認であり、これを認められるならば、たとえ最近の彼のソ連訪問において伝えられるような、諸国共産党協力の問題にからむ若干のイデオロギーの阻隔が残されるとしても、ユーゴ・ソ連関係の接近は著しく容易となるであろう。ソ連共産党は最近（一九五六年九月）東欧諸国の共産党に書簡を送り「ユーゴ共産党は本当のマルクス・レーニン主義ではないから、手本としてはいけない」という趣旨を述べたと伝えているが（朝日新聞十月八日）、未だこの問題の本質的解決はついていないと考えられる。然らば彼は自己の主張する世にいわゆる「チトー主義」原則を、自己一身の見解と考えているのであろうか。私は質問した。「中共の毛沢東が、チトー主義の道を選ぶことがあり得るとお考えでしょうか。」

大統領は両方の手で遮る素振りをしながら、耳に残る発言をする。「われわれはマルクス主義者であり、私はマルクス正統主義者である。スターリンこそ修正主義者なのである。従つてチトー主義などというものはあり得ない。中共はかの国の歴史的環境のなかで、そこに適合するようにマルクス主義を実践してゆくであろう。中共をハンガリーその他の東欧諸国と同じような衛星国の一つと考えることは、全く間違つている。しかし権威主義の権化がモスクワから消え去つた今日、中共が一段と自由に振舞えるようになつたのは、事実である。中共との対立を恐れて、ソ連の指導者たちは、むしろ中共の見解に近附こうとしているではないか。」

チトー大統領は、公式の会談には通訳を介して語る。しかし獄中生活を通して英語や仏蘭西語の勉学を始めた彼は、流暢な英語を語り、通訳の英語表現が意に満たない場合には、幾度かこれを横から訂正するのであつた。責任ある政治家には、洞察力が生命でなければならぬ。既に一九五三年の夏において、チトーは裕々として、自己の進路に世界史的な正当性を確信する態度をとつていた。しかしソ連と自由諸国との不安定な力の均衡状態の狭間を縫うユーゴスラヴィアの地位を、危な気に凝視める者のまなこには、チトーの態度は悲劇的冒険者のそれとも見えるのであつた。

二つの世界の果しない対立に対して、ユーゴスラヴィアの執ろうとする政治的位置は、局外中立であるのか、進んでバルカン或いは欧洲連邦運動への参加を目指しているのか。ミルドレッド・ディック夫人の問、「バルカン連合について、また欧洲連邦についての御意見は？」

答、「第一にバルカン連合は未だ未来の問題で、これから成熟しゆくべきものである。今のところブルガリアやアルバニアのような後進国を含むそのような連合は、われらの経済にとつて圧迫となるばかりである。ユーゴスラヴィア人は、自国の生活水準を犠牲にしてまで、後進国を支持する余裕をもつていない。同様に欧洲連邦についても、事態はそこまで熟していない。それはバルカン連合よりももつと先のことである。それは悪い考えではないし、いつかは実現に向うであろう。しかし今は未だ早過ぎるのである。急いで実現しようとする人々は、幻滅に出くわす。つまりかれ等は

今日それに不利な幾多の原因を見逃しているのである。」

バルカンには、「汎スラヴ主義」の伝統がある。R. H. Markham は、「チトーの目標のうちで、最も執拗で根本的なものの一つは、共産主義的パルチザン戦のさなかで、凡てのバルカン・スラヴ族を統合することにある。」[註一] と記したが、現実主義の政治家チトーは、ブルガリアやアルバニアのごとき後進国との連合より生ずる経済的重圧を避けて、ユーゴ自国の建設を急ごうとしている。一九五〇年と五二年の二度の大旱魃は、未だ全経済の七〇%を農業に依存し、農業輸出を海外支払の支柱とするユーゴ経済に深刻な打撃を与えた。たださえ過重の国防費に喘ぐユーゴスラヴィアは、一九五三年だけでも米英仏三国より九千九百万ドルの援助、さらに二千万ドルの旱追加援助を受けている。[註二]

【註一】 R. H. Markham; Tito's Imperial Communism, p. 205.

【註二】 Fact Sheet of Yugoslavia, published by the American Embassy in Beoglad, 1953.

ワシントン大学教授ラーライン・シンプソン夫人の質問は、ユーゴ経済と外国資本との関係にかかわる。「外国資本に対する態度如何。またユーゴ経済には、個人資本の投資可能性は存するであろうか。」

答、「今日までのところ、外資導入の処置をとつたことはないが、そういう質問を受けたことはある。原則的には、われらはそれに反対でないが、その投資条件は戦前、つまり革命的転換の前とも、また個人資本の投資されている国々に行われているものとも、全く違つている。簡単に言えば、われらが当分工業の急速な発展に必要な手段を有しないために、或る外国商社がその資本を提供しようという場合には、国家がその外国商社と交渉して、その商社が一定の期間後に、財貨または貨幣をもつて、一定の利子のついた投資額の返還を受けるように協定するが、外国商社は工場経営には干渉を許されない。それがわれらのやり方であつて、社会主義国では他の道はあり得ないのである。」

対立する二つの世界の間に立つて、近年のチトーの動きは、中間的諸国と語らつて第三勢力を結集しようとしているが、それは世にいわゆる「中立国」的地位を守ろうとするのか。ケネス・デヴィドソン博士の質問は、ユーゴ外交の基

調に触れようとする。曰く、「ドイツ、オーストリアおよびユーゴスラヴィアを含むバルチック海よりアドリア海に至る中立国組織についての御意見は？」

答、「私は、これらの国々の中立論に重きをおかない。ドイツのような国では、それは全く不可能である。これらの国々に中立を要求することは、独立と主権の原則に反する。中立性――受動的中立主義は、今日の世界では不可能である。しかし、いま一つの可能性がある――それはユーゴスラヴィア、印度その他の国々により実証されているような、いかなるブロックにも加担しない国々の接近の可能性である。ブロック制に反対するわれらの闘争は、それが世界の紛争の調整にとつて幸福な解決とはならぬという事実にもとづいている。

われらの見解によれば、ブロックというものは無い方が良いのである。政治やイデオロギーによる集団化の行われるところでは、決つて軍事的集団化に陥り、その結果が何になるかは、人のよく知るところである。一方では巨大な財政的負担を齎らし、他方では永久的な対立の危険を醸しだすのである。今日までブロックに分たれてきた諸国は、ブロックに加担することを望まぬ国々に対しても、強圧を加えたり、いずれかのブロックに参加を強制したりしないで、自らもブロックをつくつたり、そのための準備工作をしたりしないために積極的役割を果すべきことを約束しなければならぬ。現存ブロックの外側に、受動的な中立国の存立することは不可能であると私が言う場合、それはひとたび対立を生ずるとなると、斯くならざるを得ないということを意味しているのである。第一に、それらの国々の完全な受動性をもつては、世界に平和を齎らそうとする努力を、却つて傷けざるを得なくなるし、第二に対立を生じた場合に、今日の世界は不可分離的であるから、局外に留まることができず、軍事的対立は戦争に捲き込まれまいとする国々をも、何等かの方法で渦中に引きいれて了うのである。」

この問いに関連して、ブライト・ワレン牧師の質問は、チトー政策の本質を一層よく訊ね明かそうとする。「東と西とがユーゴスラヴィアで接し合おうとする戦略的事実に照して、ユーゴ政府は意識的に東と西との両方から、有用なも

のを選択しようと努力しているのであろうか。そのような進化と進歩のあらゆる基本原則が、マルクスおよびレーニンの教訓のなかに含まれていると考えられるのであろうか。」

チトー、「われらは実際的なものを信ずる実践的国民であり、実践によつて実現し得るものを見付けだそうと努めている。わが眼をもつて見得るもの、経験的に良しと認められてきたものを取るのであつて、書物のなかにあるものをほじくり出そうとするのではない。われらは東と西から、積極的なものを学び、将来においても斯くするであろう。いかなるブロックにも拘束されぬ態度によつて、ユーゴスラヴィアは、現在もまた将来も極めて積極的な役割を果すのである。デュネーヴ会談はこの線に沿つて何等かの示唆を与えたというわけではないが、人類が無益の対立に苦しめられないために当然踏み行くべき道を正しく評価し、主張してきたのである。この点で、ユーゴスラヴィアは東と西とのあいだに或る意味で橋を架けているのであつて、溝を造るよりも橋を架ける方が、遙かに勝つているのだと、私は考えている。[註一]」

【註一】President Titlo's Interview with the Members of the Sherwood Eddy Seminar, 1955, p. 10—11.

各国共産党とのあいだに、ソ連を中心に第二のコミンフォルムを結成しようとする動きがみられる。しかしその新情勢のなかで、東と西とを結ぼうとするチトーの現実主義は、嘗つてのコミンフォルムには無い世界的な視野を持ち込むことになるに違いない。

七

われらの論じ合つた幾多の話題のなかで、教育と宗教に関する応答は、印象的であつた。ペンシルバニア大学のキャロル・チヤンプリン博士の質問、「年若い市民を教育するに当つて、史的唯物論の訓練をどのようにして行つてこられたか？」

答、「小学校および中学校における教育は、世界のいずこにおけるも同じである。これらの学校では、市民の誰しも知るべき事が教えられている。今われらはわが国民の歴史的発展に即応して、若干の修正を行つている。多数の民族をもつているため、それが出来ていなかつたのである。基本的には、学校の発展は社会の発展と調和していなければならない。児童たちに、わが国の体制は良きものだということは教えなければならぬ。米国で、児童たちは米国デモクラシーは最善のものと教えられても、誰もそれを非難するわけにはゆかぬ。われらは、わが国の体制がわれわれには最善のものと言う権利をもつている。われらが児童たちに共産主義理論を詰め込んでいると考えるのは誤りであつて、成長した人々でも、やつとのことでそれを理解し得るのである。しかし児童たちは、戦前には如何に生活が苦しく、その歴史のなかでこれに打克つために、国民は如何に難儀してきたか、その統一を達成するために如何に辛苦してきたか、嘗つて社会状態は如何に苦難に満ち、自由を闘いとるためにいかに苦労したかということを、知らされなければならない。それを知らなければ、かれ等はこの国の自覚的市民となることもできなければ、これらの業績を保持することもできない。しかしわれらは、児童たちにいかなる理論をも詰め込みはしない。かれ等が成長して大学に入るようになると、初めて別箇の教育プログラムにとりかかる。そこでもまた、それ以前の教課目や西欧の学校課目を多くとり入れている。われらはいまの教科書には未だ満足していないが、これを次第にこの国の必要に適応させつつあるのである。」

哲学者ニルス・ニールセン教授の質問、「ユーゴスラヴィアにおいて教会が嘗めてきた困難と罪過とを知るわれわれであるが、現在ユーゴ教会に何か積極的貢献があると言い得るであろうか。」

ユーゴスラヴィアの宗教事情を概観するならば、〔註一〕ギリシア正教が四七%、羅馬カトリック三六%、回教一一%、その他六%で、ギリシア正教は主としてセルビア人、マケドニア人、モンテネグロ人のあいだに、羅馬カトリックは主としてクロアチア人およびスロヴェニア人のあいだに拡がつている。多年にわたるトルコの占領のもとで改宗した回教徒たちは、ボスニアとヘルツェゴヴィナに住んでいる。スロヴェニアに最も多いプロテスタントは、久しく進歩的役割を果

してきた。憲法で、教会と国家とは分離せられたが、これはユーゴスラヴィアの歴史にとつては劃紀的意味をもつていた。

憲法は、完全な宗教的自由を保障し、神学校は完全な行動の自由を認められている。教会が、政府との間にStepinac大司教事件のごとき紛争を起したのは、ナチスまたはファシストとの協力を策したからであつて、宗教指導者たるがゆえにではなく、ただその反逆的行為そのものに対して、処刑が行われたのである。

【註一】 Yugoslavia; New Land in the Making, p. 14.

チトー大統領の答、「ユーゴスラヴィアには、最大多数の東方オーソドックス（ギリシア正教）、羅馬カトリック、回教、プロテスタントその他の諸宗教がある。われわれが最大の困難を感じてきたのは羅馬カトリック、特にその高級僧侶たちとの関係であつた。カトリック教会の大部分を占める下級僧侶は、国家との協力に熱心で、実際事情に適応しようとしている。ところがバチカン法王庁に刺戟された高級僧侶たちは、われわれに種々の困難を仕向けてきた。サロニカ戦線の志願兵であつたStepinacは、幾つかの地位を飛び越えて司教となり、さらに大司教ともなつた。われわれの立場から言えば、彼は政治的犯罪者であり、戦争犯罪者であつて、斯かる者として裁判された。この国の人々は、その点をよく承知している。彼はユーゴスラヴィアにおけるバチカンの代表者であり、国際関係および国内問題でわれわれに困難を与えるために、バチカンに利用されたのである。これは宗教的感情対立の事柄ではなく、むしろ政治的な事柄つまりユーゴ統一の現実に反対するバチカンの闘争なのである。バチカンは表面的には、オーストリア、ハンガリー、ポーランドおよびわが国と伊太利との間に、カトリック的統一を実現しようとするものと見せかけた。ユーゴ統一が実現するとなると、そのような地位は失われるので、社会主義組織であれ何であれ、新ユーゴのような国家の強化を全力を挙げて阻止しようとしたのである。バチカンは今もなおユーゴスラヴィアに挑戦している。国際的には、バチカンはユーゴとの抗争を、政治的権威と宗教との対立であるかのように見せかけている。われらは宗教が、強制的な行政

措置によつて人間の思想から根絶し得ると考えるほど、愚かではない。宗教は個人の私的事柄であつて、それをどうすることもできないし、われらが何かを為そうと試みているわけでもない。われらは、教会の代表者たちが物事の真相を理解し、教会の任務のみに専念することを望んでいるのである。」

【註1】 ユーゴスラヴィアの宗教事情については、"Yugoslav Review" Vol. 2. No. 9 (Dec. 1953), p. 15f. に "A Protestant View of the Religious Situation in Yugoslavia" という興味ある報告が掲げられている。それによれば福音主義教会は、牧会活動を強化するために、政府より経済的援助をさえ与えられている。しかしチトーの「教会の任務にのみ専念する」ということが。基督教倫理の立場からの政治への発言を一切遮断することを意味するならば、それが果して真の宗教的自由を支えるものとなるかどうかという問題は、残されていると言わなければならない。

一国の政治的指導者として、チトー大統領の応答態度は想像にもまさつて明快で、淀みなく率直であつた。彼の明るい風貌を凝視めながら、私が忘い続けていたのは、ふるさとの国日本の政治家たちの一般的に暗く不透明な態度であつた。海面をわたるそよ風が、テーブルの上の熱帯植物の葉をゆるがす折ふしを、チトーのまなざしは窓の外に向けられ、アドリア海の濃藍の水をみつめる。この力のまなこがこの世に在るあいだに、この波瀾の国ユーゴスラヴィアの国運はどう展開することであろうか。チトーの横顔をじつと凝視していると、ライスコヴィチの詩のなかの「国の運命」という言葉が、神秘なひびきをもつて、私の胸にせまりくるように想われるのであつた。

——一九五六年一〇月……